

熱田ブランド推進プロジェクト “あつた人（びと）” になろう！

「白鳥公園今昔物語 ～デザイン博が変えたもの、残したもの～」

大変長い歴史を持つ熱田の地。太古の時代から人々の営みがあり、いくつもの時代を経て、重層的に歴史文化が積み重ねられてきました。区内には、熱田神宮や断夫山古墳、白鳥古墳、高蔵古墳群、七里の渡し跡（宮の渡し公園）等々、多くの歴史文化資産があります。そうした中で今回は白鳥公園一带をご紹介します。白鳥公園一带では、かつて「世界デザイン博覧会」が開催されました。デザイン博の志は、“熱田が好き、良くしたい” という“あつた人（びと）”の思いにもつながるものがあるかもしれません。

<現在の白鳥公園一带>



「白鳥貯木場（太夫堀）」の歴史

国際会議場から白鳥庭園に至る白鳥公園一带は、堀川を挟んで対岸にヤマトタケル伝説の白鳥古墳、ミヤヅヒメ伝説の断夫山古墳を眺めるロケーションにあります。現在の姿からは想像できないかもしれませんが、この一带は1980年代の半ばまで、「白鳥貯木場」という大規模な貯木場でした。

白鳥貯木場の歴史は、江戸時代の「太夫堀」まで遡ります。1610（慶長10）年、名古屋城築城に際して福島左衛門太夫正則が堀川を開削するにあたり、材木置場や船置場として掘られた大池が始まりで、福島正則の官名にちなみ、「太夫堀」と呼ばれていました。木曾の御用林は切り出された後、筏に組まれて木曾川—伊勢湾—堀川を經由して名古屋の城下町に運ばれました。その際、堀川下流、熱田湊（宮の渡し）から800mの地点にあった白鳥貯木場一带で、集積、製材されました。

明治時代になると、熱田周辺では、原料資材としての材木が豊富にあったことや、精進川（新堀川）の改修に伴う都市基盤整備が進んだことなどから、“木材”にまつわる産業、“時計”や“鉄道”、“航空機”等々、近代産業が発展しました。

<江戸時代の白鳥地区（木曾式伐木運材図会 1856（安政3）年）>



<白鳥貯木場（1975（昭和45）年 南からの眺望）>



<白鳥貯木場の筏師>



<堀川叶橋（現在の御陵橋付近、1986（昭和61）年頃）>



「世界デザイン博覧会」の開催

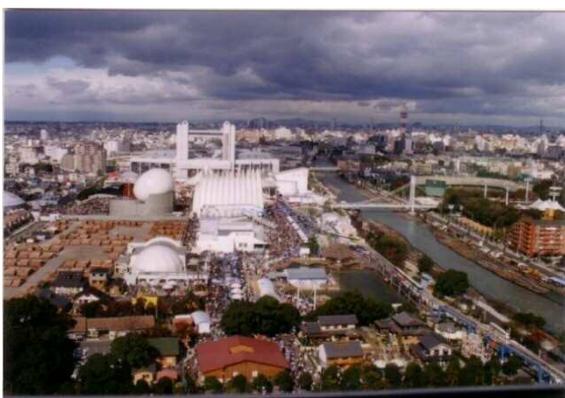
1980年代、貯木場としての役割を終えた後、一帯は名古屋市に譲渡されました。跡地利用の検討が進められる中、1989（平成元）年、名古屋市制100周年を記念して、「世界デザイン博覧会」が白鳥の地をメイン会場（名古屋城・白鳥・名古屋港の3会場）として開催されました。“木材を中心とする名古屋のものづくり産業発祥の地”ともいふべき「白鳥」の地が、奇しくも“デザイン”博のメイン会場に選ばれました。これには、明治期以降の名古屋市の東西軸発展に対する“南北軸の再生”＜堀川と本町通で熱田台地上の名古屋城－熱田湊（熱田神宮周辺）を経て、名古屋港に至る。＞という視点もありました。

白鳥会場には、テーマ館である「白鳥センチュリープラザ」や多くのパビリオンが立ち並び、モノレールや展望タワー、大規模遊具も各種ありました。会場の南端には、本格的な数寄屋建築の茶室、清羽亭を有する「池泉回遊式の日本庭園」も造られました。屋外ステージでは連日、ミュージカルや日替わりのイベントが開催されていました。

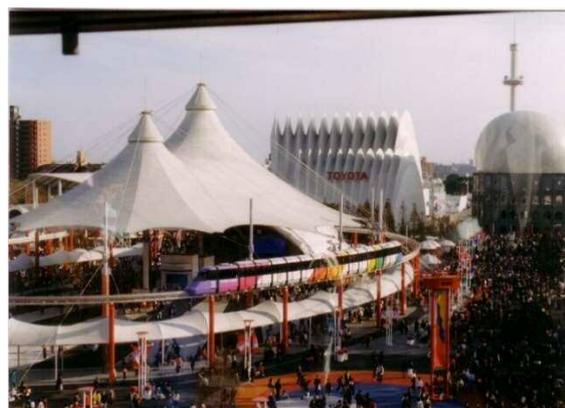
名古屋城－白鳥－名古屋港の3会場は、シャトルバス（2階建てバス）や水上バスで結ばれていました。臨時ラジオ局「FMデポ76.4」も開設され、熱心なファンの方から毎日多くのお便りが寄せられました。

135日の開催期間を通して、白鳥会場には延べ700万人を超える多くの人々が訪れました。

＜デザイン博白鳥会場（敷地の一部や堀川にまだ材木が見える。）＞



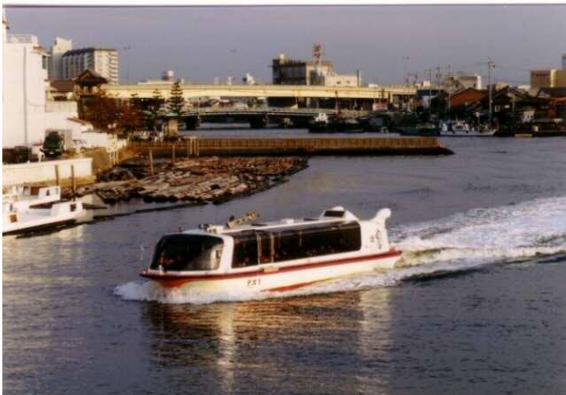
＜デザイン博白鳥会場＞



<シャトルバス（2階建てバス）名城会場 ⇄ 白鳥会場>



<水上バス 白鳥会場 ⇄ 名港会場>



<臨時ラジオ局「FMデポ76.4」>



デザイン博が変えたもの、残したもの

ではなぜ、市制100周年記念で、“デザイン”博だったのでしょうか？ 交通博覧会等さまざまな案もあったようですが、「世界デザイン会議」の誘致が決まった等の背景もあり、紆余曲折を経て、“デザイン”博に決まったようです。

当時、“名古屋がデザイン？”と揶揄もされましたが、博覧会の企画から運営まで携わったある人は、『“ものづくり”の伝統を生かしながら、21世紀に向けて、名古屋がもう一皮むけるにはどうすれば良いかを考えた。“デザイン”とは、日本語で“意匠”のこと。人が心に抱く夢に形を与えて物とし、心を満たす創造行動。夢を持ち、その実現に向けて計画を立て、人々がその実現に向けて進むこと。だから“デザイン”博なのだ』と熱く語ってくれました。

確かにその言葉どおり、博覧会の開催期間中からその後を通して、名古屋のまちや、人々の大きな変化を感じることとなりました。デザイン博は、一過性のイベントではなく、“デザイン”をキーワードとした地域おこしの出発点、“ムーブメント”だったと思います。インフラの整備とともに、名古屋の文化的土壌の掘り起こしや人的ネットワークを形成し、それまでの慎重・堅実という名古屋のイメージを変えるきっかけとなりました。デザイン博のまいた種は、その後の名古屋のまちづくりに引き継がれていくこととなります。

名古屋市のデザイン施策に関しては、1989（平成元）年の名古屋市（議）会による「デザイン都市宣言」や「世界デザイン会議（インダストリアルデザイン）」の開催以降、1995（平成7）年の「世界インテリアデザイン会議」開催、1996（平成8）年の「国際デザインセンター」開館に続いて、2003（平成15）年には「世界グラフィックデザイン会議・名古屋」が開催されました。

名古屋市は、世界3大デザイン会議のすべてを開催した世界で初めての都市となり、2008（平成20）年には、ユネスコのデザイン都市にも認定されました。

<名古屋市ユネスコ・ロゴマーク>



名古屋市はユネスコが認定するデザイン都市です

デザイン博の終了後、白鳥センチュリープラザは「国際会議場」に整備され、学術会議や大規模イベント等に利用されています。日本庭園は、御嶽山を源流とし木曾川、伊勢湾、熱田湊（宮の渡し）そして白鳥に至る“歴史と風景の水の物語”をテーマに「白鳥庭園」に再整備されました。

白鳥公園一帯には、中部森林管理局の「熱田白鳥の歴史館」も開館し、貯木場の歴史や林業の歩みを貴重な写真や映像、ジオラマ等で楽しく学ぶことができます。一帯には、貯木場やデザイン博の歴史を物語るモニュメントや石碑、銘板（パネル）なども設置され、堀川沿いにはウォーキングルートも整備されています。2007（平成19）年に移転開学した名古屋学院大学は、COC事業や私立大学ブランディング事業等を通して、防災や観光、子育て、福祉等々、熱田区のまちづくりになくてはならない存在となっています。「熱田ブランド」の取組みも当初から一緒に進めているものです。

是非一度、白鳥公園一帯を歩いて歴史を感じていただけたらと思います。そして熱田のことを知り、好きになる、“あつた人（びと）”になっていただけたらと思います。

<国際会議場、名古屋学院大学、太夫堀跡（一部）>



<白鳥庭園>



<熱田白鳥の歴史館>



参考（外部リンク） 「都市の自然のモノサシ研究会」（モノサシなごや）

・デザイン博が変えたもの、残したもの

https://blog.goo.ne.jp/monosashi758/e/3e90c32b3f978308343830fb2cec6cec?fm=entry_aws_sleep

・白鳥庭園★再発見～日本庭園と生物多様性～

<https://blog.goo.ne.jp/monosashi758/e/d0781ab5ca419683b0fbef72c8bd91d1>